

## 第4回調布市社会教育計画策定ワーキンググループ 議事録

1 日 時 令和4年8月16日(火) 午後1時30分から午後3時30分まで

2 会 場 調布市教育会館3階302研修室

3 出席者 8人

篠崎議長, 宮下副議長, 荒井委員, 進藤委員, 田村委員, 西牧委員, 新田委員, 毛利委員

4 事務局

社会教育施設職員2人, 社会教育課職員3人

北部公民館長, 武者小路実篤記念館事務局長

○篠崎議長

それでは、ただいまより、令和4年度第4回調布市社会教育計画策定ワーキンググループ会議を始める。まず、本日の出欠状況を事務局に確認をお願いする。

○事務局

本日は、福田委員, 矢幡委員が欠席である。

社会教育施設の職員も参加させていただいている。

○篠崎議長

世界の状況は混とんとしているが、社会教育の世界ではこのような冊子を作ることは重要であって、我々の責任も重い。こここのところで、他自治体の社会教育施設をいくつか訪問したが、いろいろな工夫がされており勉強になった。その内容も含めて何らかの形で計画に反映できればと思う。今日できれば、ある程度確認できればと思う。

○事務局

資料の確認をさせていただく。次第, 計画素案の案, 日野まなびあいプランをお配りしている。不足の資料はないか。

素案の案について説明させていただく。

資料は、上位計画との整合を図り、文言を整理したほか、これまでに委員の皆様からいただいたご意見と、これまでの経過を踏まえて、作成した計画素案の案である。下線が引かれた箇所が変更箇所となっており、コメント欄にどのような観点で修正したのかメモを記載している。

主な修正点について説明する。目次をご覧ください。

今回、1章と3章の構成を、教育プランに合わせる形で整理した。1章には計画の概要が分かるよう、1 策定の経緯, 2 目的, 3 策定の視点, 4 計画期間, 5 各計画等との関係, 6 基本的な考え方を示し、3章で社会教育計画の推進にあたって、ということで、1 連携・協力体制, 2 社会教育計画の進行管理を記載した。そして、これまで本編にあった「調布市における社会教育」やアンケート結果、計画策定の方法は資料編に移して掲載することとした。

2章の計画の基本となる目標と施策のうち、これまであった、基本となる施策の1-4「青少年リーダーの育成」については、施策1-3の「青少年の居場所づくり」を「青少年

の育成」に変更することで、今回ワーキンググループ会議で出された意見などを反映することができ、青少年リーダーの育成についても包含できる表現とできることから、1-3に含めて記載することとした。詳細はP19をご覧ください。この「青少年リーダーの育成」については、教育プランや基本計画の記載に合わせ、「地域で活躍できる人材の養成」と事業名の記載を変更している。

次に、施策3-4にあった「地域のボランティア活動につながる学習支援」については、掲載のある事業が指導室の「地域学校協働本部の活用」のみとなっており、タイトルと事業の関連が弱いと考え、より関連性の強い施策1-2「地域と学校の連携の推進」に事業を移動し、施策3-4は記載を削除している。

一つ一つの文言の整理については、説明を省略させていただくため、コメント欄を御覧いただくようお願いしたい。

この資料をもとに、今後の取組や文言について、議論いただき、案に反映していければと考えている。どうぞよろしくお願いいたします。

○篠崎議長

今日、ある程度形にしたい。皆さんの意見を聞かせてほしい。

○宮下副議長

補足の説明。紙資料では下線と網掛けしか分からないが、昨日送付された資料では、赤字が一番初めに直した箇所、青字が2回目に直した場所、緑字が最新の修正となっているとのことである。本日の検討では下線と網掛けのみで十分かと思う。

ここからの進行は、私が行う。

委員の率直な意見を聞きたい。意見はあるか。

○新田委員

P33、「生涯学習」を市長部局に移したとあるが、何を移したのか。我々の議論は生涯学習に関する議論はしなくて良いのか。

予算決算の数字が出ていなきや議論にならない。

ABCの評価が見たい。

○事務局

この計画は教育委員会が所管する事業について対象としている。

決算額の資料については、現在各課に照会中であるため、後日お示しする。

評価については、社会教育計画単独で行っておらず、教育プランの点検・評価で行っている。その資料は第1回ワーキンググループ会議でお示ししている。

○新田委員

評価の資料は今日出して欲しい。

○宮下副議長

予算と決算の資料は今後出していただけるのか。

○新田委員

出す気が無いのではないか。

資料をコピーしている間に他の意見を言う。二十歳のつどいはやめましょうというのが私の意見。もともとこの事業が始まったのは、大学への進学率が10%もいかないような昭和20年代の話。就職先がない若者がたくさんいる時に若者を元気づけようとして始まった事業。すでにその必要性はなくなっている。お酒飲んで、それを市の職員が休日手当をもらいながら世話するというのは、おかしい。ほとんどの子が大学に行くので、大学を卒業した際やその年の夏休みなどに中学校や高校の同窓会として行えば良い。着物を着ることができない子もいる。それを着てきてくれと言う市の職員もどうか。前例踏襲で事業を行っているのだろうが、そういったところに対する考えが全くないのはいかがなものか。

○宮下副議長

P23の3-4の事業。皆さんからのご意見を出していただいたうえで、議論すべきものは議論していきたい。他の委員は意見があるか。

○進藤委員

P15、学校図書館と公共図書館の連携について。小学校3年生を対象にした図書館ガイダンスの実施がコロナで出来ていないと思うが、個人の図書館カードを作ることができる良い機会である。このガイダンスに参加しないと、近所に図書館があることや中央図書館には本がたくさんあって色々調べる事が出来る事などがわからないため、図書館に行かなくなってしまふ。コロナ禍で中止しているようだが、継続して欲しい。昔は、特別支援学級も図書館に行ってカードを作ったり読み聞かせの会があったりしたが、今は全くない。知的障害のある人も本を読むことが好きな人もるので、ぜひ障害のある子にもガイダンスや読み聞かせを積極的に行って欲しい。P12「子どもの読書活動の推進」にもつながるが、現在は学校から要望があれば特別支援学級で読み聞かせの会を行っているようだが、学校からの要望を待たず、指導室又は図書館から働きかけてほしい。そのことを計画に反映して欲しい。P16「2-1障害のある人と共に歩む学び」の「図書館利用支援サービスの推進」とあるが、これは当事者が図書館に行って申し出ることによって受けられるサービスなので、このサービスを受けるためにも、小学校の時代に図書館に触れる機会を作るよう連携して取り組んでほしい。計画のどこかに記載して欲しい。

また、現在小学校では、タブレットを支給されている。マルチメディアデジターという音声読み上げや文字の拡大等、文字背景色の変更など、自分が読みやすいようにできる機械があるが、これまでは図書館に行かないとなかった。その機能がタブレットですべての教科書に対応出来るようになっている。図書館のサービスとしても、デジター図書をオンラインで提供するなども利用支援サービスの中に入れてほしい。図書館の利用の選択肢が多様であることを義務教育の子どもに伝えてほしい。そのことを計画に反映して欲しい。

○宮下副議長

P15「学校図書館と公共図書館の連携による子どもの読書活動の推進」に特別支援の子どもに対することを追記できないか。また、P17「図書館利用支援サービスの推進」その

ものとニュアンスが違うのかもしれないが、利用支援ということで関連付けが出来ないか。タブレット活用について新たな項目だてができないか。

第2章のそれぞれの項目は基本的に現在行われていること、今後も継続される可能性が高いものが記載されているが、社会教育行政において、新たな状況に対応していく中で、項目を加えることを考えてみる必要があるのでは。

○宮下副議長

この間資料が配られたが、説明はあるか。

○事務局

基本計画の事務事業評価の資料である。

○新田委員

生涯学習の中のどこについて議論すればいいのか。

○事務局

社会教育計画については教育委員会の所管する事業について掲載している。

○新田委員

生涯学習については一切話し合わなくていいのか。分離をして欲しい。

○宮下副議長

行政のすみわけはあるだろうが、市民が行っている生涯学習は社会教育として行われている部分も多いのでまたがった議論をすべきかとは思ふ。第2章に載せられている事業は、教育委員会が管轄する事業になる。教育委員会が所管だが生涯学習に関わるものも多数あるという事かと思うので相互に乗り入れているのが実態かと思う。切り分けは、第2章に載せられているものについては、教育委員会の社会教育に関する事務が網羅されているが、1章の理念の中には生涯学習ということにもまたがった議論にしていかななくてはならないという事かと思う。他の委員の御意見を伺う。

○西牧委員

P17に外国籍市民の定住化が進み、配慮や支援が必要と書いてあるが、具体的な施策は国際理解教育ということで、日本人が他国の人を理解する事業になっている。しかし、

P19「3-1 地域でともに学ぶ機会の提供」の方でも、同じ内容。外国にルーツのある人への配慮だとすると、むしろ多少日本語がわからない人も学べるような公民館活動が必要なのでは。広報などについてもやさしい日本語を一部使う、外国語対応するなど、外国の方が学ぶというように、主語を外国の方にするよう言及していった方がいいと思う。日本の学校に通う外国人保護者に向けた講座等、早急に求められているのではないか。そのような視点を入れられたらと思う。

○宮下副議長

前の計画では外国の方の視点に立つということが薄かったのかもしれない。他はどうか。

○毛利委員

青少年リーダー育成の項目の件はこれで良い。昔は、青少年をリーダーにすることを目的としていた。今は、それよりも上の世代も含めて地域活動のリーダーになるよう働きかける必要があるのでは。それが後半の「学びを通したまちづくり」や「学びあいのネットワークを築く」につながっていくのではないか。「学びを通したまちづくり」に記載するのが良いのかもしれないが、子育てが終わった世代に向けての地域活動に向けてのリーダー育成や地域への参画への機会づくりを醸成するというような項目を「学びを通したまちづくり」や「学びあいのネットワークを築く」に組み込んでいくと今後に向けて良いのではないか。

○宮下副議長

すっぱり抜けている世代に向けた取組について検討の余地がある。追加の資料があった。

○事務局

教育委員会の点検・評価の資料である。毎年公表している。

○宮下副議長

この評価は個々の事業というより、それらをまとめた施策の評価ということで良いか。

○新田委員

生涯学習について、教育プランの評価、事業番号29～34までが我々の範疇ということか。評価がBになっている。我々のプランで、Aにする必要がある。なぜBなのか。

○西牧委員

数値目標は分かりやすい数字にしている、解釈は、社会教育施設の満足度が基準に達しているかどうかの結果になっているのではないか。違う指標にすると変わってしまうのでは。教育プランの指標がすべてそうなので。

○事務局

数字で結果が得られるというものということで、成果指標にできる事業は限られている。

○新田委員

これを見ただけでは、BをAにする方策を考えることはできない。

○西牧委員

使ったデータは調布市の市民意識調査なのか。

○事務局

施策9は、そう。施策8はリーダー養成講習会の参加者になっている。リーダー養成講習会の参加者数の令和2年度の数字はコロナの影響を受けている。

○新田委員

施策9の満足度についてコロナはあまり関係ないようだ。

○事務局

施策8、10は実数になっているので、コロナの影響がはっきりと見て取れるが、施策9は満足度なのでコロナの影響はあまりはっきりとはわからない。

○進藤委員

満足度は漠然としたものか。図書館のどの事業がということではなく、全体としてという

事か。

○事務局

そうである。

○宮下副議長

対象と回収率は。

○事務局

3000人を受作為抽出で調査票を送って返送いただいている。45%くらいだったと記憶している。

○新田委員

公民館の目標値はなぜ50%なのか。

○北部公民館

基準値をみていただくと、当時は41%と満足度が低かったので、当面は50%はクリアしようということで目標値としたと聞いている。

○新田委員

令和元年は74%となっている。誰がどういう風に決めたのか。

50パーセントが目標値はいかがなものか。

○事務局

教育プランと基本計画の評価基準は連動しているはずなので、基本的には基本計画を策定するときに4年間で達成可能と思われる目標を案として決める。その後市民会議や行政経営会議などを経て正式決定する。

○新田委員

教育委員会でのような議論をした覚えがない。

○西牧委員

教育プランの会議に原案は出てきているが話しあったことはない。

○新田委員

事務局が決めているのか

○事務局

行政側で案を作成し、教育委員会に計画策定の際にお諮りした際に目標値も入った状態でお示ししていると思う。

○進藤委員

素案には既に入った状態で示されている。よほど変な目標値でなければ意見は出ないと思う。

○篠崎議長

新田委員の指摘は大切なこと。これまで我々が考えてこなかった視点。どこかで明らかにした方が良い気がする。

○新田委員

どういう経緯で決まったのか、オープンにしてほしい。

○事務局

計画策定については、策定の市民会議などがあり、市民の方も参加され、結果も公表されている。

○新田委員

目標値50%はないだろう

○進藤委員

私もこれまで何度も聞いているが、4年間で達成可能な数字にするというのは説明されている。

○田村委員

過去の数値が50%を超えたことが無いので、当時としては50にするしかなかったが、たまたま令和元年、2年は満足度が上がったという事だと思う。

○新田委員

決め方がオープンではないので、オープンにして欲しい。

○事務局

先ほどからお話しているのは、事務方として、案を作る際は事務局で案を決め、その後に市民会議の皆さんや議会に説明したりといったオープンにする段階は踏んでこの形になっている。事務方としては案を作ったというだけの話。

○新田委員

オープンにするというのは、この50%という数字がおかしくないかと言った時に、いつ、だれが決めたのかを追求できるように中身がオープンになっているということ。その決めた人にたどり着けばいい。その時の責任者は誰なのか。それがオープンにするということ。

○宮下副議長

基準値が妥当だったかというのはこれまでの議論のとおり。満足度が基準を超えているのにBなのは何故か。B評価にした経緯はわかるのか。生涯学習社会への対応をしようとした施策自体はよく回っていると考えていいのか、しかし、B評価だから問題があるのか、そのあたりはどうなのか。評価を参考に次の計画をより良いものにしていくということでこのような議論が出来たのは良かった。

○進藤委員

コロナによって実施できなかったというのが絡んでいるのでは。

○田村委員

他のものと合わせた総合評価となっているのではないかと考えられる。曖昧なものだと考えられる。いずれにせよ、成果指標としてはこれだけ。例えば、地域学校協働本部だとすると、令和3年までに全校開設という目標があり、全校開設しているので達成度100%となるが、実際のの中身を見ると自分は設置しただけでは達成しているとは思えないが、市の中の評価では仕

方ない部分もある。これも単純に人数はこれだけいけばこうということにはならない部分があると思う。評価についてどうするかというのはここで議論するのは難しい。

○西牧委員

この前のアンケートには具体的な要望があった。多数かどうかわからないが、少数でも鋭い指摘はあるので、出来るところは実施すべき。いくらお金が使えるのかがわからなければ夢みたいな話になってしまう。予算の配分について話し合いたい。「学習を通した市民参画の推進」に関して子どもたちも年齢、発達に応じて意見表明したり政策に参画する練習になるのだが、夢発表会にある「自由に夢のある意見を表明できる」というのは、意見を言っただけでまちは変わるという実体験にならない。子ども議会の例で、実際に10数万の予算を付けて、運用している例がある。夢を語るだけでなく、実際に予算をつけることができるとよい。

○新田委員

調布もむかし子ども議会をやっていたが、子どもの質問が鋭くて議員が答えられず無くなった。

○西牧委員

このような経験をしていかないと18歳で選挙はできない。

○毛利委員

そういうのがまさに社会教育の芽になる取組なのではないか。今の大人もそういうことが足りないので両軸でやる必要がある。

○宮下副議長

次の計画を考える際にどのような方向性が大切なのか、それを裏付ける点で予算や人の配置の問題がある。検討すべきだと思う。しかし、社会教育委員の会議の権限が及ぶ範囲として、予算の検討は含まれていないので、できるところ限度はどこなのかは考える必要がある。

○新田委員

意見できるだけで構わない。

○宮下副議長

他の方はご意見いかがか。

○田村委員

特に意見はない。特に指導室の所はいろいろな課と関わり合っているので、難しい。

○荒井委員

これまで、地域の団体の世代交代の課題を意見してきた。若者の育成を継続して行うだけでなく、社会教育の世界で抜けている世代の大人の育成にも力を入れたい。社会教育という言葉の入りにくさがある。

～5分休憩～

○宮下副議長

次は、9月22日である。その次が10月4日で素案を決定しなくてはならない。検討できる機会が限られている。

まず、新田委員から提案があり、西牧委員からも賛同があった予算について。どのような事業にどれくらいお金が使われているか、金額の大小だけでなく、どのくらい重要な施策として行われているかを予算面から検討したい。

○事務局

現在、令和元年、2年の決算額を今各課に照会をかけている。早くて来週、お示しすることができればと思う。

○宮下副議長

来週、リーダー・サブリーダーの会議で確認し、メールで皆さんから意見をいただこうと思っている。今日出していただいた様々な意見について、それぞれの事業の内容を再検討していただくような内容も含まれていたのでも、リーダー・サブリーダーの会議後に取りまとめたいので、それぞれの主管課に意見を知らせ、事業に反映できるかのフィードバックを得ようと思う。それについても皆さんにメールでお返ししたいと思う。

9月22日には意見を集約した形で、最終的な議論が出来ればと考えている。

残りの時間で、例えば、二十歳のつどいをやめるであるとか、大人対象のリーダー育成、あるいは地域活動の担い手育成についてやったほうがいいのか、大きな変化については意見をまとめておく必要がある。

○田村委員

二十歳のつどいをやめるのは、今回の会議や計画策定で扱いきれるものではないと思う。

○進藤委員

同窓会は別にやればよいと新田委員が言っていたが、成人を祝う会で恩師に会う、友人とつながり合うなどの機会である。

○荒井委員

参加する側は、同窓会のつもりで参加しているのではないかと。確かに当初の趣旨とはずれているのかもしれない。

○進藤委員

もちろんそうだと思うが、楽しみにしている子もいる。これを各学校の同窓会にして任せると無くなってしまふ。出席率も50%は参加すると考えると、市民からニーズのある事業だと考える。

○宮下副議長

第2章に載っている施策全般的に、前例踏襲的な事業も多い。一方で、その時代のニーズや社会的な意義を常に検討しながら見直しをしていく必要がある中の一つなのかもしれない。

○田村委員

内容を実行委員会が決めたりして決して意味がない事業とは思わない。

○進藤委員

若い人が考える企画だからおとなしく聞いている面もあると思う。

○篠崎議長

結局実行委員の熱意がすべてで、最初のうちはコンクールで賞を貰ったりしていた。それらもあって調布市は頑張ってきたと思う。エンターテインメントの面からみると、これらのイベントで50%の出席はすごいイベント。人を集めるということからすると大変魅力のあるものと考えられる。

○宮下副議長

大人の担い手育成について。西牧委員の意見で、限られた予算をどのように使うか考えることは教育的な意味を持つという話があったが、若い人にそのような施策を打っていくことも可能性としてはありかと思う。

○西牧委員

子ども参加の子ども議会はできると思う。作文指導は人を選ぶのも大変だったが、発言した内容が実現するのであれば指導する方法も変わる。

○進藤委員

夢を話すけど、その先が無い。意見を言って終わりだと続いていかない。話し合ったことが実現するとなると、状況は変わるのではないか。

○事務局

子どもからの意見を関係課に送っている。昨年出た話では、その意見が既に為されていることか、これから為すことか、考えもしなかったことで今後検討することなのか、市として明らかにするような取り組みが出来たら良いと考えている。今後その方法については検討していくところである。

○西牧委員

自由で夢のある意見について、「調布をどんなまちにしたいのかの夢」であることを明記したい。反映したことをフィードバックされるようなものにして欲しい。子ども議会のような形にしていくか、在り方を含めて検討するというような表現にしたらどうか。子どもたちのまちづくりへの意見を表明する、実現に向けて良い方法を考えていく、というような表現に。いますぐ子ども議会の記載をするというより、可能性を表現できると良い。

大人の育成については大人のリーダー講習会にしても集まるのが難しいのではないか。成人教育にそのような講座を設けるとかは考えられる。

○進藤委員

それでも人は集まらないのではないか。今回の基本構想策定市民会議ほどではないが、条例について考えるというような身近なものだとかどうか。学習会ではなく、自分たちの生活をより良くするために、結果に結びつくものでないと参加は見込めないのではないか。

○宮下副議長

まちづくりの課題で、上手く取り上げられれば若い人も考えてもらえる可能性はある。

○篠崎議長

Z o o mなどのオンラインを活用すれば若い人の参加も見込めるのではないか。

○宮下副議長

第1章はどうか。基本的にはこれまでの体系を維持することになっているが今現在の社会情勢にあった記載をする必要もあると思うが、今のところこの3つの立場、3つの原則を継承していくということによろしいか。

○篠崎議長

これに絡めて、多様化された社会を、何とか分断から守り、一つの社会として維持していくということは教育の、特に社会教育の問題であると思う。演劇を例に挙げれば、日本は、演劇を教科に入れていない世界主要国でも数少ない国。ほかの人の考え方、ほかの人の心情を認識し理解するということが演劇の教育上強い部分。演劇では、他の人間を演じることで自分ではない他の人間を感じ理解する事が出来るようになる。自分ではない人間の心を察することができる人間になるのか、これは大きな差になってくる。演劇を観ることすら学校で難しくなっている現状では、これから先には分断の時代がきっとやって来る。20年先が見えてくる気がする。演劇を教育の中に取り入れることが調布で少しずつすすめば違う調布になるのではないか。このような視点も入れることができれば。

○宮下副議長

生涯学習は個人が自己実現を図ることと考えると、社会教育は社会として、個人が集まった社会の中で実現すべきことに目配せしているのが違うところ。他者の考え方を理解するうえで大事な理念とを感じる。上手く原則や立場に組み込めればいい。

○進藤委員

3つの視点、立場を見ると、これだけでは、他者を想像できない。かみ砕いた補足があると良い。

○篠崎議長

社会教育とは何かというのがパッとわかるものが良い。

○宮下副議長

社会や集団を前面に出すと、誤解を生む可能性もある。誤解を生まないような表現、その塩梅が難しいところである。

多様性、例えば10年前は男女だったが、現在はL G B T Qなどの問題に目配りしていることを表現する必要はないか。また、I C Tを活用した内容が公民館のW i - F i の話しか書かれておらず、前面に出てきていないところが残念である。検討していくという姿勢が見えれば十分ではないかという話もあったが、1章の中に現代的な課題に対する対応を盛り込んでいければと考えている。

○篠崎議長

立川市や23区のようにWi-Fiのルーター貸出やっても良いのでは。

○宮下副議長

社会教育計画が背中を押すような役割を果たせればよい。

○進藤委員

目指す方向を示唆するという意味では、4年間で達成できなくとも、書いた方がいい。P25のWi-Fiについて、事業として書くときは公民館でとなるが、前の方で、もう少し広い意味で文章を書ければ。公民館でのWi-Fi利用促進はWi-Fiを取り付けるだけでなく、タブレットを貸し出すなど、利用方法を教えるなど活用の支援も含まれてほしい。何年以内に達成するというのではなく、方向性を示して欲しい。

○北部公民館

公民館について、ハード施策は計画に盛り込んだが、ソフト施策にも目を向けたい。東京都と共催でシニアのためのスマホ講座を企画している。登録団体だけだが、PCの貸出は行っている。Wi-Fiに限らず、取り組んではいるので、計画に盛り込めるか検討する。

○実篤記念館

ソフトの充実に努めている。小学生のために作ったものが、大人の反響もある。毎年、課題を作って進めていきたい。地域の担い手については考えているところである。20年近くボランティア育成に取り組んできたが、今はコロナでできていない。定年年齢が上がってきたせいか、参加する世代が上がってきてしまっており、実働期間が短くなってきているのと、動ける内容が変わって生きているので、ボランティアのプログラム見直しが求められている。若葉小地区の地区協は若い人が増えていると聞いているので、地区協と連携し、担い手を育てていく等アプローチの仕方を考えていきたい。

○篠崎議長

ボランティアは増えているのか。何をしているのか。

○実篤記念館

人数は30人くらいがマックス、今は少し減って20人位。65歳から70歳くらいまでの人が参加している。実篤公園や旧邸のガイドやイベントの会場設営、受付、普及活動の広報、書籍の整理、文化財の掃除等をやっている。色んなメニューを考えて、活動している。

○篠崎議長

問題はたくさんあるが、少しずつでも議論をしていくことができれば。